

令和4年度 府中町立府中中央小学校 学校自己評価表【最終評価】

学校教育目標	自ら伸びる 「問い直し」を大切にして、教育活動に山場を創り、「生きた言葉」で自覚化して、他者と関わり協力して乗り越えていく	経営理念 ミッション ビジョン	「学校は子どもが育つ土壌である」 （自ら伸びる意思の形成をなす土壌） 【使命】地域と共に児童も大人も共に成長していく機会・場を創造する学校 【経営展望】「教師こそ最大の教育環境」を自覚し、日々の業務の充実と研鑽に励む
--------	---	-----------------------	---

ビジョン（中期経営目標） 実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	<p>昨年度は、「自ら伸びる」を本校の方向目標として新たに定め、スタート。自己認識力の向上のためには、「自ら伸びた」と実感できる場が必要と考え、コロナ禍で一昨年度は中止した各種行事を感染拡大防止に配慮しながら、分散したり ICT 機器を活用したりしながら開催した。しかし、1 学期は、行事を通しての山場が児童に意識されなかった。例えば、運動会に関しては、一堂に会しての開催は中止したものの各学年が取り組んできた演技を動画視聴という形で保護者へ発信したが、児童の認識としては「運動会は無かった」であった。そこで、2 学期以降は、山場のある教育活動を意識し、成長の実感を振り返らせる取組を重ねた結果、児童が主体となる取組は自己認識力の向上につながる事が明らかとなった。</p> <p>今年度は、昨年度の成果を足場としながら、教師が準備した山場を児童に登らせるのではなく、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていけるような教育活動を創造していく。こうした教育活動の核は、次の2点。</p> <p>① 『「生きた言葉」に出会い、「生きた言葉」を深め、「生きた言葉」で分かり合う』学びのプロセスを「学びの型」と捉えなおした「問い直しのサイクル」を意識した授業づくりや行事づくり</p> <p>② 「生きた言葉」で暮らし（学級）を問い直す「はちの子の心得」を軸にした学級経営</p> <p>これら①②を核として、問い直し、更新していくことが、今年度の大きな方向性である。</p> <p>そのために、学校経営の柱を「問い直しのサイクルを（学びの型）を意識した授業づくり（教師の授業力）」「生きた言葉が生まれる学級経営（学級経営力）」「自己認識を問い直す行事づくり（自己認識力）」「子どもや大人の集いが充実する環境づくり（地域との協働）」の4つとし、自らの目指す学校像・児童像を追求していく。</p>
--	---

学校経営の柱に係る考え方

a 「問い直し」のサイクルを意識した授業づくり（教師の授業力）	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく授業づくりへ転換を図っていくために、「問い直し」のサイクル（学びの型）を意識した授業を展開していく。これらの学びによる児童の育ちは、「語彙力」「表現力」を指標とする。
b 「生きた言葉」が生まれる学級経営（学級経営力）	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく学級づくりへ転換を図っていくために、「じまんのはいく」で暮らしの出来事を見つめ、「はちの子の心得」で暮らしを問い直しながら、互いに成長していく集団を創っていく。
c 自己認識を問い直す行事づくり（児童自治）	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく行事づくりへ転換を図っていくために、各種行事において児童自身が課題を自覚し、それを一つ一つ超えていきながら、「自分はこう伸びたい」という意思を形成していく。
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり（地域との協働）	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく環境をつくっていくために、コミュニティ・スクール活動を充実させ、地域の方が教育活動に参画しながら児童との関わりを深めていく。

評価計画（中期経営目標を設定して1年目）

A 中期（3年間）経営目標	B 短期（今年度）経営目標	C 目標達成のための方策	主な成熟度		現状	D 評価指標	目標値（%）	E 評価結果			
								10月		2月	
								達成値	評価	達成値	評価
a 「問い直し」のサイクルを意識した授業を構築する	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく授業づくりへ転換を図っていくために、「問い直し」のサイクル（学びの型）を意識した授業を展開していく。これらの学びによる児童の育ちは、「語彙力」「表現力」を指標とする。	・読書量が増える活動を推進する。（図書祭り・ビブリオバトル・読書検定等）	4段階	自分の考えに確信をもったり、自分の考えの修正を迫られたりする。	◎	・1ヶ月の読書冊数3冊以上の児童	90%	95.7%	A	92.5%	B
			3段階	本から得た思いや考えを他者へ問いかけ、照らす。							
			2段階	本の中から自分の好きな言葉や生き方につながる言葉を探す。							
			1段階	決められた時間に本を読む。							
		・年6回の公開授業や示範授業による相互参観を通し、「問い直し」のある授業づくりに取り組む。	4段階	児童自身が学ぶことに自信をもったり考えの修正を求められたりしながら、新たな問いに出会う授業。（問い直しのきっかけのある授業）	◎	・学力調査の全国平均3ポイント以上の児童	80%	—	A	54.4%	B
			3段階	児童の意欲を喚起する教材で授業に驚きをもたせ、児童相互が問いを深めている授業。（教師の思いがある授業）	○						
			2段階	教師の発問によって児童が答えを探し出している授業。（教科書に沿った授業）	○						
1段階	本時のめあてが教師により提示されている授業。（中央小スタンダード）	○	・「学校楽しい」と学習意欲8割以上	80%	80.7%	80.5%					
b 「生きた言葉」が生まれる学級経営を構築する	暮らしを問い直す場を意図的に創出し、児童が主体的に参画する学級経営を推進する。	・「はちの子の心得」を基に、2ヶ月ごとに暮らしを問い直す。	4段階	「はちの子の心得」を基にした取組により学級への所属意識が高まり、自己の成長が実感できる。	◎	・「はちの子の心得」における振り返りの肯定的な記述	80%	94.2%	A	92.2%	A
			3段階	「はちの子の心得」を基に、めざす姿を自覚し、振り返りを重ねている。							
			2段階	「はちの子の心得」の問いを基に、めざす姿を学級で話し合っている。							
			1段階	「はちの子の心得」を意識していない。							
		・月1回「じまんのはいく」に取り組み、自然や人・暮らしの出来事（事実）に目を向ける機会を創る。	4段階	俳句の発表を通して、価値観を共有し、自分の考えや価値観を問い直している	◎	・「学校楽しい」と学級集団における適応感8割以上	80%	83.7%	A	83.6%	A
			3段階	俳句の創作過程で「生きた言葉」を吟味し選ぶ活動を通して言葉の面白さを感じている。							
			2段階	「じまんのはいく」で「生きた言葉」を自覚し、事実に向いている。							
1段階	「じまんのはいく」で五七五のリズムに言葉を合わせている。	○									
c 行事の自己認識を問い直す	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく行事づくりへ転換を図っていくために、各種行事において児童自身が課題を自覚し、それを一つ一つ超えていきながら、「自分はこう伸びたい」という意思を形成していく。	・成長の喜びを実感する学校行事を創造する。 ・中学校の自治活動につながる児童会行事を創造する。 ・児童主導で「お昼 meet」を運営する。	4段階	自分たちで企画運営し、伸びたい姿を自覚しながら、次の行事へつなげることができる。 4年・6年	○	・「学校楽しい」と自己肯定感の結果を言葉で自己評価できる児童	85%	自己肯定感72%	B	自己肯定感71.8%	A
			3段階	自分たちで出したアイデア実現に向け、他者と協力し、自分の良さ等が自覚できる。 1年・2年・3年・5年							
			2段階	各種行事にまじめに参加し、自分の良さ等について考えることができる。							
			1段階	教師が声をかけないと動かず、自分の良さ等が分からない。							
d 児童や大人の集いが充実する環境づくり	児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく環境をつくっていくために、コミュニティ・スクール活動を充実させ、地域の方が教育活動に参画しながら児童との関わりを深めていく。	・学校だより等で地域へ学校の姿を発信する。 ・コミュニティ・スクール活動を中学校区で交流し、取組を共有する。	4段階	より良いアイデアを創造しながら、児童が育つ環境づくりに参画している。	◎	・教育活動の満足度（保護者アンケート）	85%	93.2%	A	93.3%	A
			3段階	各種たより等を見て、サポーター活動の申し出がある。							
			2段階	各種たより・HPが更新され、情報発信を積極的に行う。							
			1段階	各種たより・HPが更新されない。							

評価基準… A：目標達成（95%～100%） B：おおむね達成（80%～94%） C：もう少し（60%～79%） D：できていない（59%以下）
 目標値を100%として、達成率を計算する。「例 目標値85%→アンケート結果92% →目標値を超えているので評価はA



F 結果の分析・解釈 (中間 10月)

<p>a</p> <p>○1ヶ月の読書冊数3冊以上の児童が95.7%達成できている。 →学級単位で図書室を利用する機会を確保し、朝読書の時間に読む本がない環境を作ること、また、並行読書の推進として町立図書館や学校図書館からの一斉貸し出しの利用も進んでおり、不読率の減少につながっていると考えられる。 ○語彙力向上に特化した帯タイムは全ての学年で実施できている。 →5月の部会から毎回語彙力向上を目指した取組を紹介し合い、各学年で取り入れやすいものから実施してきたことや、1学期の各学年の取組を夏季休業中に全体交流し、他学年の取組の良いところを取り入れたり、刺激を受けて新たな取組を考えたりして2学期の帯タイムの準備を夏季休業中に行ったことが語彙力向上に特化した帯タイムの構築につながったと考える。 ○『学校楽しいーと』学習意欲8割以上」80.7% →公開授業や示範授業において、「問い直し」のある授業づくりに取り組み、児童の意欲を喚起し児童相互が問いを深めることのできる授業を目指した日々の実践が、児童の学習意欲向上につながったと考える。また、「問い直し」のサイクルを取り入れた日々の実践の中で、児童相互が「生きた言葉」に出会い、自分自身の学びを問い直したり深めたりすることができ、自己の成長を自覚できていることが学習意欲につながっていると考える。</p>	<p>b</p> <p>○「はちの子の心得」における振り返りの肯定的な記述は94.2%である。 →児童は、学級での目標を設定し、それに向かって取り組むという素地はできている。しかし、教師が、児童の取組をいかに肯定的に評価するか、どんな姿からその伸びを見取るかについての研修が必要であったため、夏季研修を通して、学校職員の共通認識をもつようにした。 ○『学校楽しいーと』学級集団における適応感8割以上」83.7% →月1回の「じまんのはいく」の取組において、季語から想像したことや空想の世界を俳句にするのではなく、事実や実体験に伴った「生きた言葉」を俳句にすることにより、自分の考えや思いを自分の言葉で表現することができるようになってきていることが児童の自信につながっていると考える。また、考えた俳句について担任とやり取りをする中で、新たな言葉と出会ったり、思いを共有したりすることで人間関係を構築し、さらに出来た俳句をクラスの友達と紹介し合うことで互いのよさや違いを受け入れることができるようになり、学級全体の所属意識や向上意識が高まったことが、学級集団における適応感の向上につながったと考える。</p>	<p>c</p> <p>○『学校楽しいーと』自己肯定感の全校平均値72%である。 自分がどう伸びたいかが文章で書ける児童は83%である。 以上、2つの平均値が78%である。 →目標値の85%に達することができなかった。 ○「自己認識を問い直す行事の創造」に向けた各学年の成熟度は、4段階のうち3段階は5学年と6学年、他学年は2段階であり、達成度58%である。5・6学年が3段階まで達成できたのは、各行事において実行委員を募り、児童の主体的な活動になるよう支援した成果である。 また、お昼の「はちの子meet」については、「失敗も経験」ととらえ、児童主体の活動を継続している。その結果、自分の考えを原稿なしで話す機会が増え、11月4日実施の避難訓練でも自分たちの行動を振り返る発表をすることができた。 『学校楽しいーと』での自己肯定感のとらえ方は児童により様々である。本校では自分の長所も短所も含めて自分を認識することを目指している。自己肯定感のとらえ方が硬直しているのではないかと分析している。 それに対して、自分を認識し、どう伸びたいかを記述できるという力がついたのは、全教科・領域で言葉を大切にして「書く」ことを積み重ね、適切な時期をとらえて振り返りを行った結果だと考える。 最後に、「行事の創造」については各学年の方策や評価について共通認識が成熟していないためと思われる。</p>	<p>d</p> <p>○保護者アンケート「府中央小学校の教育方針や教育活動には満足している」に係る肯定的回答は93.2%。 →児童が成長の喜びを実感する学校行事の取組をはじめ、分散参観、学校便り等で教育活動をより分かりやすく広く知らせている。また、本校の示すビジョンを教職員が日々の授業の中で意識し、改善を図っている結果、肯定的評価につながったと考えられる。 ○保護者アンケート「コミュニティ・スクールの一員として、教育活動に参加し子どもと共に学び合おうと考えている」に係る肯定的回答は73.9%。 →CSの取組においても学校教育方針を共有する場を設け、定期的活動は、昨年度に比べ1回あたりの参加者が1.5倍増加。1学期のCS活動に参加した保護者総数は413名で長子の7割に該当。町内の小学生をもつ母親のフルタイム就業率は約3割(パートタイム約4割)を踏まえ、日中活動に参加できる保護者のほとんどが参加している。アンケートの73.9%の解釈としては、授業に関わるサポート活動限定として捉えたり、設問の「学び合おうと」の言葉から具体的なイメージがわきにくかったりしたのではないかと考える。</p>
--	--	--	--



G 改善方策案

<p>a</p> <p>○引き続き、図書館や図書室、はちの子文庫の利用を進め、並行読書を行うなど学習内容に関連させながら、児童が本に親しみやすい環境づくりに取り組む。また、本の中から自分の好きな言葉や生き方につながる言葉を探せる活動にレベルアップできるように、帯タイムに本の紹介や読んだ本のまとめをするなど、学年の児童の実態に合わせて取組を行う。 ○冬季休業中に2学期の帯タイムの取組を交流し合い、語彙力向上に向けて、各学年のまとめとしての3学期の取組を考える機会とする。また、年度末には今年度の各学年の研究を報告する会を開き、発表内容の一つとして帯タイムの実施内容とその成果と課題を分析する。これらの活動全体を振り返り、来年度の取組を考える一助とする。 ○三校合同研究会や示範授業などにおいて、「問い直し」のサイクルを意識した授業づくりを行い、実践・相互参観することで、教師一人一人も児童と共に学び、児童と共に自ら伸びる機会とする。また、年度末に、今年度の研究についての振り返りを行い、研究の成果と教師自身の成長を自覚できるようにすることで、さらに児童の学習意欲を高める授業づくりの研究が深まるようにする。</p>	<p>b</p> <p>○学年主任を中心とした、学年経営に基づく「はちの子の心得の取組」を学級ごとに話し合うことで、学校全体での共通意識をもった取組にしていく。また、学校行事を大きな山場と設定しながら、はちの子の心得をもとにした問い直しの場を設定し、児童が一年間を連続して伸びを見つめられるよう取り組んでいく。 ○「じまんのはいく」の取組のために俳句を書かせるのではなく、行事や日々の感動を伴う出来事の機会捉えて俳句を書かせる活動を行うことで、まさに今生まれた「生きた言葉」を表現し、吟味できるようにする。また、俳句を書いて感じたことや、友達の俳句を読んで感じたり考えたりしたことを交流し合うことで学びを共有し、信頼関係を構築していく。これらにより、互いに認め合える学級づくりを行う。</p>	<p>c</p> <p>○今後予定している「大縄交流会」「はちの子デー」「はちの子祭り」など児童が主体となって活動する行事に向けて、各学年が「山場」を意識した取組になるように学年会、分掌部会を充実させる。 ○また、各学年の目標達成のための方策や評価の方法を見直し、いつ、どんな振り返りをするのかを生徒指導部・健康安全部合同部会を設け、明確にする。 ○自分の長所も短所も認識し、どう伸びたいかを書くことは、今後も継続して取り組む。 ○お昼の「はちの子meet」を継続し、3学期には次期執行部とのスムーズな接続を図る。</p>	<p>d</p> <p>○教育活動においては、一定の成果をあげているので、児童や保護者に日常活動と結びつく肯定的評価を具体的にフィードバックする。また、各分掌部の現状分析や過去の取組などの振り返りを行い、問題意識や危機感、重点的な課題を教職員で共有し、知恵を結集し、改善を図る。そのために、教職員が気軽に意見が交換でき、建設的に創造を高め合うことのできる熟議の場を設ける。 ○CSにおいては、安心して、参加できる環境づくり(児童の伸びようとする姿や成長を見守っていける環境)と共に参加者に学びの認識ができるような言葉がけをしていく。また、サポーター協議会の開催等で学校だけが教育を担うのではなく、「地域の教育力向上に携わっている」という当事者意識をもってもらえるように意識改革をしていく。学校としても「社会に開かれた教育課程」や「地域とともにある学校」づくりを全教職員周知のもと、推進を図り、協力体制を整えていく。(CSミニ研修を開催)</p>
--	--	---	--

学校の大きな方向性に照らして：
教師が準備した山場を児童に登らせるのではなく、児童自身が山場を意識しながら自ら伸びたと実感できる教育活動を創造していく。
・「問い直し」のサイクルを意識した授業により教師も児童と共に自ら伸びる機会を生み出していく。
・児童が書いたもので学級経営の様子を問い直す。
・実行委員方式を取り入れ、児童が行事をつくる主体へと高めていく。
・サポーター協議会や職員研修を通して、学校・保護者・地域の各役割を自覚し、「共に学校をつくる」意識を共有する場を創造していく。



H 結果の分析・解釈・変容（中間② 12月）

<p>a</p> <p>○昨年度、高学年で図書時間が確保しづらいという課題があったが、2学期も、図書館の利用や、並行読書、本の紹介などを進めることができており、1ヶ月の読書冊数3冊以上の児童が92.2%達成できている。5年生も80%、6年生も89.9%達成できている。</p> <p>しかし、成熟度1の活動にしか取り組めていないことから、読書習慣が身に付いているとはいえない。</p> <p>○2学期終了までに実施した全学年の帯タイムの時間のうち、9割以上で語彙力向上に特化した内容を実施することができた。実施内容も「ことば集め」や「視写」等7種類以上の取組が実施されたことにより、国語科で自分の考えを書く時だけでなく、他教科での感想や自分の考えを書く際にも役立てることができてきた。また、自分の考え等を書く量が増えた。ただし、今まではアウトプットの取組が殆どで新しい言葉と出会うなどインプットの取組になっていない。</p> <p>○6月に第3学年、9月に第4・6学年、11月に第1・2・5学年が研究授業を行い、年6回の公開授業を達成することができた。示範授業等の相互参観も9割程度実施でき、「問い直し」のある授業の在り方について研究を深めることができた。このことにより、「問い直し」のサイクルを意識した授業づくりについて全教員がそれぞれの教材に向き合い、研究推進に取り組むことができた。</p>	<p>b</p> <p>○「はちの子の心得」を継続的に取り組んだ結果、児童が「はちの子の心得」を生活に取り入れながら生活することでできるようになってきている。振り返りの中には、学級で話し合ったことをもとに、自分なりに考えて取り組んでみたことや、それによって伸びた自分の力を見つめる記述が増えてきた。中には、学級の高まりに目を向けることができる児童もいる。目指す振り返りの姿について、職員間でも共通認識がもてつつある。</p> <p>しかし、学級ごとに目標の設定にはばらつきがあったり、各担任による目標の捉え方についても差が見られ、学年経営や学級経営の視点に立った取組には位置付いていない。</p> <p>○雪が珍しくたくさん降って積もった日に俳句を書かせるなど、月に一度決まった時間に俳句を書かせるのではなく、行事や日々の感動を伴う出来事の機会を捉えて書かせることにより、体験したことや実感したことが「生きた言葉」として現れた俳句になってきた。また、俳句を書くことに慣れ、何気なく過ごしてきた日常に目を向けたり、今まで気が付かなかった自然の様子等に気が付くようになったりして、より多くの出来事を言葉にすることができるようになってきた。</p>	<p>c</p> <p>○11月「長縄交流会」12月「はちの子祭り」という「山場」を通して、各学年の成熟度は上がってきている。</p> <p>4段階…5・6年 3段階…1・3・4年 2段階…2年</p> <p>特に「はちの子祭り」では、自分たちで出したアイデア実現に向け、友達と協力して準備や運営をし、当日訪れた児童間での望ましい交流の姿が見られた。執行部児童が作成した振り返りアンケートの結果からも児童自身が楽しさを味わい、自分の成長を実感することができる行事だったことが分かる。</p> <p>①とても楽しかった …70% 楽しかった …28% あまり楽しくなかった …2% ②協力する力が伸びた …27% 良さを見つける力 …19% どちらの力も伸びた …53% どちらも伸びなかった …1%</p> <p>○各学年の目標達成のための方策や評価の方法を見直すため、生徒指導部・健康安全部合同部会を実施し、2つの部で実施する取組をいつ、どのように評価するのかについて話し合った。</p> <p>○「はちの子meet」は52回実施することができた。コミュニティスクールの方や給食委員会等、「はちの子meet」の活用が広がってきた。また、月初めの委員会後の委員長発表も原稿なしで「話す」ことに挑戦する委員長が増えた。</p>	<p>d</p> <p>○季節に応じた図書掲示やブックカバーかけ、文庫の入れ替えなどの活動をし、児童の読書環境を整えることができた。また、新刊コーナーや各学年で学習している内容と関連させた特集を定期的に組み、児童が本に親しむようになってきた。</p> <p>○図書サポート活動を進める中で、図書委員会の委員長や副委員長とCSとの意見交換を行い、よりよい図書室の利用の仕方について話し合うことができた。子ども達が自分達の手で企画・運営できるようサポートすることで、児童の自己認識力の向上の一助となれればと考えている。</p> <p>○夏休み塾や緑中フェスなどの活動を通して、中学校の生徒や地域の方々との交流が増えた。また、地域の活動において、児童主体でサポート活動の充実に向けた意見交換ができ、児童目標のスムーズな活動を促進することができるようになってきた。</p> <p>○多様なサポート活動をすることで、地域や保護者が本校のよさを知るきっかけとなったり、児童が安心して学習にのぞむことができた。</p>
--	---	--	--



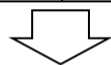
I 改善方策案

<p>a</p> <p>○本の中から自分の好きな言葉や生き方につながる言葉を探せる活動にレベルアップできるよう、帯タイムに取り組める活動を教務部主体で考え、発信していく。学年実態に合わせて取り組めるような内容を検討していく。</p> <p>○1・2学期の取組の成果と課題から、さらに語彙力を高め、「豊かな言葉のつかい手」となる為に、児童が今までに出会っていない言葉に出会うインプットの取組を行う。例えば、詩の暗唱、気持ちを表す言葉の意味調べ、新しく出会った言葉を使った短文づくり等、学年に応じた内容を考え、計画・実施する。</p> <p>○2学期までに各学年で実施した研究授業の成果と課題を生かした教材研究と単元計画を3学期にも行い、教員自身が自分達の実践を問い直し、研究をさらに深めていく。</p>	<p>b</p> <p>○担任が学級経営に基づいた指導を続けることで、「はちの子の心得」が児童の生活により浸透していくと考えられる。また、学年主任を中心として、学年経営の視点に立った目標設定が進むことがより一層求められる。3学期には、1年間の振り返りとなる活動にもなるので、この一年での伸びを、児童自身が自覚し、見つめられるよう、日々の取組を進めていく。</p> <p>○「じまんのはいく」の取組を継続して行うと共に、校内の取組に留めず、いろいろな作品募集に応募することで目的意識や相手意識をもった実践とする。また、考えた俳句について担任とやり取りする時間を確保し、表現することに自信をもったり伝え合う仲間がいることで所属意識が高まったりできるようにする。</p>	<p>c</p> <p>○今後、「縄跳び認定」「卒業を祝う会」等の行事や避難訓練、はちの子デー（縦割り遊び）、クラブ活動紹介、など、「こなす」取組ではなく、「ねらいをもって児童自身が成長を実感できる」取組になるよう、分掌部や担当者間の連携を行う。</p> <p>○「はちの子meet」を継続し、次期執行部との接続や、活用の広がりを図る。</p> <p>○学年末の反省や評価の方法について、再度合同部会を設け、明確にする。</p>	<p>d</p> <p>○次年度に向けて、学校と地域が一体となった足場の基礎をこれまで以上にしっかりかため、子ども達も共に活動できる仕組みや場を増やす。また、本校の経営目標に照らし合っながら、季節を感じる掲示や詩の掲示を通して、様々な言葉に触れる機会をつくり語彙力の向上となるようにしていく。そして、児童の豊かな心の育成を図りたい。さらに俳句や古典コーナーの展示、蔵書（歳時記、図鑑、各学年の学習に応じた本など）を増やしたり、家庭で、実施されなくなってきた伝統行事や文化について児童が学びを深めたりできるように読書環境の充実を図っていきたい。児童が本を通して、学んだ言葉を家庭で知らせるなど改めて伝統行事や文化のよさを知るきっかけづくりにつとめたい。</p> <p>○中学校区のCS事務局が集まり、個の意識改革につながった。また、各校のよさや課題を共有し、次年度への活動の構想となっている。</p> <p>例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み塾を本校と南小の6年生のみ緑ヶ丘中学校で実施する。 ・サポーター会議に教員や各委員会の委員長（児童）に参加してもらい、よりよい学校づくり活動として共に携わっていく。
--	--	--	---



J 結果の分析・解釈（最終 2月）

<p>a</p> <p>○図書委員会が実施したビブリオバトルや、図書検定により、児童の読書に向けての意欲が高まった。高学年の図書室利用についても機会が増えており、児童が本に親しむよい結果となっている。</p> <p>○1. 2学期の反省を受けて、語彙力を高めるために辞書引きや言葉集めなどの「インプット」の活動を取り入れた帯タイムを行った。また、漢字やローマ字など当該学年で覚えておきたい語句について習熟を図った。しかし、標準学力調査における語彙力の項目では、正答率の低い設問もあり、引き続き取り組んでいく必要がある。</p> <p>○相互参観は100%達成し、全教員で「問い直し」のある授業づくりに取り組むことができた。しかし、「読むこと」の研究だったため標準学力調査の「読むこと」の正答率は高かったが、読み取った内容に自分の考えを加えて条件に合わせて文章を書くことに大きな課題があり、全国平均3ポイント以上の目標を達成することができなかった。</p>	<p>b</p> <p>○3学期をスタートにあたり学級目標と関連させて「はちの子の心得」を考える取組を行った。教職員自身の「はちの子の心得」に係る振り返りは次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級で話し合い、深めていることが、廊下歩行や掃除の姿から感じられるようになった。（専科教員） ・学級経営の方向性を、子どもと一緒に意識して暮らしを作った実感がある。（若手教員） <p>これらのことから、「はちの子の心得」は、教職員が学校目標達成を追求するにあたっての方向目標となりつつあることが感じられる。</p> <p>児童の振り返りの記述にも高まりが見られ、目標達成に向けて前向きに取り組んだり、達成感を感じたりする記述が増えている。</p> <p>以上のことから1年間の取組を通して、児童も教職員も、目標に向けて取り組むことができるようになったと考えている。</p> <p>○なかなか俳句が書けなかった児童が書けるようになったり、一つだけ書いていた児童が三つ書けるようになったり、苦手な児童もその子なりの成長が見られた。4月から継続して取組んだことで俳句作りに慣れてきたことや、考えた俳句について担任とやり取りをすることで信頼関係を構築し学級の所属意識が高まったことなどにより、表現することへの抵抗感が軽減されたと考える。</p>	<p>c</p> <p>○1月の部会で、3学期に重点的に取り組むことを確認した。2月初旬までに実施した「縄跳び認定」や「はちの子デー（縦割り遊び）」「新執行部選出」の取り組みでは、児童の実態にあわせてねらいを明確にし、担当者間が連携を図りながら、実施することができた。</p> <p>○これまでに61回「はちの子meet」を行うことができた。執行部児童は、原稿を「読む」活動から、相手に応じて質問したり、感想を添えたりする「話す」活動へと表現が高まってきた。また、毎月の委員会報告を行う委員長児童も原稿なしで報告できるようになった。「はちの子meet」の内容も作文の発表や先生へのインタビュー、給食委員のメニューに関わる物語の紹介など、いろいろな児童の良さや成長を共有できる活動になってきている。</p>	<p>d</p> <p>○各学年の校外学習やゲストティーチャーによる総合的な学習の時間等でCSの方々とともに同じ目標で活動することにより、児童が安心安全のもと学習を進めることができ、「地域とともにある学校づくり」を知るきっかけにもなった。また、様々な声かけやお知らせにより、保護者が安心して気軽にサポート活動に参加し、児童の様子、学級や学年の様子から学校教育方針への理解度が高まった。</p> <p>○保護者のサポート活動への参画意識、教職員の連携・協働は高まりつつあり、組織的な取組の構築はできつつあるが、継続的な取組の仕組みづくりに課題があると考えます。</p> <p>○「地域とともにある学校」づくりに向けて、校内環境整備や地域への回覧板を作成、掲示するなど、地域の方が気軽に参加できる活動を推進することに努めた。結果、未就学児の保護者や環境整備中に声をかけてくれる地域の人が現れるようになった。</p>
---	---	--	---



K 改善方策案

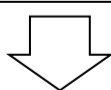
<p>a</p> <p>○本と生活をつなげることが課題である。本の中から自分が好きな言葉を探したり、生き方や考え方について学ぶ場を作り、それを言語化して表現できる場を設定することで、本と生活のつながりを図っていく。</p> <p>○3月に一年間の帯タイムにおける語彙力向上を目指した各学年の取組を交流し、その成果を共有することで来年度の取組の手立てとなるようにする。</p> <p>○年6回の研究授業の継続とそれに向けての校内研修を計画し、今年度の教員一人ひとりの学びが次年度に生かされるようにする。相互参観は一学期から呼びかけていたものの実質二学期からの取組となったため、一学期から積極的に自らの指導力向上のために相互参観が行われるよう、計画していく。</p>	<p>b</p> <p>○2か月毎に目標を設定する取組は継続していく。今年度の取組を生かし、次年度は4月当初から「はちの子の心得」と学級・学年経営目標を関連づけた学級目標を設定できるように、テーマの再考を図り、職員間の共通認識をもつ。また、学校行事や総合的な学習の時間など、学習活動との関連付けも密にすることで、「はちの子の心得」が児童の学校生活の中心となる取組となるようにしていく。</p> <p>○決まった日に俳句を書かせるのではなく、行事や日々の感動を伴う出来事の手紙を捉えて俳句が書けるよう、「遠足」「初めての水泳」「虹が出たとき」「初雪がふったとき」等どんな場面で俳句を書かせるかをよいかリストアップし、全教員が共有できるようにする。</p>	<p>c</p> <p>○児童の自主性を高めるために、各行事の取り組みについて確認する場を大切に、各行事のねらいを明確にした取り組みを進めていく。</p> <p>○各学年の目標達成のための方策や評価の方法を見直し、いつ、どんな振り返りをするのかを生徒指導部・健康安全部合同部会を設け、明確にする場を設ける。</p> <p>○執行部主催の「はちの子meet」に取り組み始めて2年目を終えようとしているが、今後は、委員会中心の発表にとどまらず、各学年からの取り組みの発表の場にも広がるように、児童の意識を高める取り組みを行っていききたい。</p>	<p>d</p> <p>○「地域とともにある学校」「開かれた教育課程」の実現に向けて、他校種と情報交換を密にし、繋がりを活用しながら本校の強みを生かした取組を行っていく。そのために、児童が自分ごととして捉え、主体的に学びを深めることができるようサポーター会議に委員会やクラブの代表、担当教員に参加してもらい仕組みを構築し、誰もがよりよい学校づくりの当事者として新たな山場を主体的に創造し、乗り越えていくことができるようにする。</p> <p>○児童が府中町で生まれて、学んでよかったと思えるよう、地域の方々に支えられて育っていることを実感できるように、見守り隊や府中町の各施設の職員や地域の方々との繋がりをこれまで以上に深め、教育の質の向上を図っていく。</p>
---	--	---	---

学校の大きな方向性に照らして：

今年度は、「問い直し」をキーワードに、児童自身が山場を意識しながら「自ら伸びる意思」を育てていく教育活動を創造してきた。しかし、個々によって山の高低は異なり、登り方も一律ではないと感じた。また、「自ら伸びる意思」は個の活動によってのみ育っていくものではなく、集団の中で他者と協働しながら共に育っていくものである。個の育ちと集団の育ちは別物ではなく、問い直したり変容したりと、動きながら主体形成をしていくことを再認識した。

したがって、次年度は、児童自身がめざすべき山を創り、他者と協働しながら「群れ」から「集団」へと成熟していく過程を大切にしたい。つまり、「問い直し」を大切にしながら、「自ら伸びる」意思を形成する学びを創造していききたい。そのための具体方策は次のとおり。

- ・自己決定と自己有用感のある授業（自由進度学習・協働学習）を展開し、主体的な学びを実現していく。
- ・「はちの子の心得」によって2ヶ月ごとに暮らしを問い直したり、学級経営と連動させた「じまんの俳句」で人や暮らしの出来事に目をむけながら、「自らの伸び」を自覚し、自発的・自治的に学校行事をつくっていく。
- ・コミュニティ・スクール、地域の方に委員会活動やクラブ活動等の教育活動に参画していただき、共に子どもを育てる役割を担っていただくことで、「地域とともにある学校」の深化を図っていく。



学校関係者評価を受けての改善方策（修正）

今年度の学校自己評価に対して、学校関係者評価では、全体を通して概ね「適切である」との評価であった。したがって、学校が作成した改善方策（上記K）に基づき、次年度の学校を運営していく。本校のコミュニティ・スクールの強みを生かしながら、「問い直し」を大切にしたい教育活動を創造することで、児童・教師・保護者・地域の方々の当事者意識を醸成し、学校の信頼度を高めていく。